

学術ライブラリーをボランティアの手で整理する —大阪市立自然史博物館における「大山桂貝類学文庫」の事例

石田 惣*

要旨

大阪市立自然史博物館では2014年より、貝類学者であった大山桂（1917-1995）の文庫の寄託を鳥羽水族館から受けている。この文庫の目録を作成してデータベース化し、配架するという整理作業を2018年からボランティアの手により進めている。作業では様々なツールを導入して、個々のスキルに関わらず誰でも参加できるような配慮を行っている。また、作業に携わる人自身の学びにつなげることを目的として、ボランティアが文庫の紹介をするミニ展示を制作するという試みも行っている。本稿では整理作業を開始して2年間の概要を記す。

キーワード

文庫 データベース ボランティア 外国語文献 自然史博物館

大山桂貝類学文庫



大山桂（おおやま・かつら、1917-1995、図1）は、海軍省マカッサル研究所などを経て、戦後に地質調査所の調査員となり、退官後は鳥羽水族館の研究員を務めた貝類学者である（奥谷，1996）。大山

は分類学、すなわち生物の種の特徴を記述してお互いの類縁関係を体系化する分野を専門としていた。分類学では種の特徴を文章ないしは図像として文献化する手続きを取るため、研究者の蔵書は

しばしば膨大なものとなる。大山は特に文献上の記述を重視する研究手法を採っていたこともあり、その規模は際立っていた。彼は貝類学及びその化石の理解に必要な地質学の書籍・学術雑誌を個人で片っ端から購入し、自身の研究資源としていたのである。分類学が興る18～19世紀の西洋で発刊された貝類学の図譜類（図2）を初めとして、主立った専門雑誌は創刊号から揃いで持つなど、図書館に頼る必要のない環境を整えていた。当時、国内では大山の手元にしかない文献もいくつかあり、求める研究者には貸出もしていたようである。ちなみに大山は日露戦争で満州軍総司令官を務めた大山巖を男系の祖父に持つ家筋であり、蔵書の購入に必要な資金には困らなかったのだろうと想像される（例えば波部，1996）。

大山が1995年に亡くなった際、蔵書はすべて鳥羽水族館が引き取り保管をしていた。その後、長期保管により適した環境に置くとともに、調査研究・普及教育目的での利用を促進するため、2014年に大阪市立自然史博物館へ一括して寄託されることになった（石田，2014）。実は寄託時に目録が未完成だったため、その正確な分量は移送時に梱包するまでわからなかったのであるが、最終的に書架延長で約270メートル分に及んだ（段ボールで約700箱）。今までに様々な研究者の書棚を見たり、没



図2 ドイツで発刊された貝類図譜，
Neues Systematisches Conchylien-Cabinet
(F. H. W. Martini and J. H. Chemnitz, 1769-1829).

*大阪市立自然史博物館

後に蔵書を引き取ったりしてきたが、私の限られた経験の範囲では個人蔵書でこの規模は（おそらく投じたであろう額も含めて）大山が最大である。現在、当館では「大山桂貝類学文庫」（以下、大山文庫）として収蔵庫の一角でまとめて保管をしている（図3）



図3 大山桂貝類学文庫

ボランティアによる整理作業

大山文庫の受け入れ後、寄託対象を確定させるため、当館において目録を作成することが鳥羽水族館との間で確認された。これについては明示的に期限を定めたわけではないが、あまり先延ばしにもできない作業である。また、その前段階として文献類を背表紙からある程度探索可能なように並べ替える必要もあった。これは大山文庫を利用可能な状態にするためにも最低限必要である。この作業は相当な時間を要すると思われるが、当館には専任の司書がない。一方で学芸員がかかりっきりになることも現実的ではなく、何らかの策を練る必要がある。そこで、ボランティアを募り、複数の人手を借りて定期的に作業を進めることで、何とか目処をつけることを考えた。

当館では標本作製や標本整理、普及教育行事の運営補助、調査研究など様々な博物館活動で有志のボランティアが活躍している（例えば和田，2009, 2013, 2018; 山西, 2011; 無署名, 1995）。普及教育事業を除いてその資格や募集方法などを一律に定めているわけではないが、館内ではボランティアを安価な労働力として位置づけるのではなく、活動を通じて携わる人自身の学びにつながるべきである、という考えを共有している（山西, 2011; 無署名, 1995）。大山文庫の整理でも、この方針を基本と



図4 大阪湾海岸生物研究会の定点調査(大阪府泉南郡岬町豊国崎)

して整理作業を始めることにした。

まず、ボランティアの募集は「大阪湾海岸生物研究会」の会員から募ることにした。同研究会は当館の動物研究室に事務局を置く研究サークルであり、博物館では筆者ともう一人の学芸員（魚類担当）が世話人をしている（他に館外の世話人が数名いる）。1981年から大阪湾南東部の自然岩礁海岸5カ所で定期的に生物相調査を行う活動をしており（図4）、海洋生物の勉強会を行ったり、遠方での合宿を行ったりもしている。会員数は2020年度時点で約200名で、アマチュアから職業研究者まで幅広い層の人が集まっているが、共通するのは海の生き物に関心を持ち、その知識を深めたいという意識を持っている点である。大山文庫の文献を手にとってもらったり、その書誌情報を調べてもらったりする過程で、貝類や周辺分野に関連する知見が広まる機会になるのでは、という期待である。また、人となりがわかっている人、また博物館活動の意義やその価値観をある程度共有している人に来ていただく方が、ボランティア組織の運営を円滑にしやすいという判断も研究会会員を対象にした理由である。

募集は2018年2月に行い、同年4月から開始した。以降、月に1～3日程度活動日を設けて整理作業を進めることにした。2019年度末現在で17名が登録し、その年齢層の内訳は30代：2名、40代：6名、50代：3名、60代以上：6名となっている。仕事を持つ人もいるため、活動日は平日と週末の両方を設定するようにしている。活動日の告知はボランティア用のメーリングリストを用い、当日誰が参加予定なのかはGoogleカレンダーでも共有している。2018年4月から2019年1月までに計43日の活動日を設け、参加人数はのべ171人である。2020年

2月以降は新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、残念ながら活動は休止している。

整理作業はおそらく数年以上は続く長丁場である。さらに、作業を効率よく進めるうえで経験者の存在は欠かせない。そのため、ボランティアが長続きできる環境を整えたいと筆者は考えている。活動のコアタイムは午前10時から午後4時（お昼1時間休憩）とし、この間なら参加時間は自由としている。活動に参加する人にはたまに来る程度でも大丈夫であること、個人に課せられる「ノルマ」はないこと、関心があれば書物の中身は自由に見てほしいこと、などを伝えており、作業内容の設定でも心がけるようにしている。

整理作業の流れと内容

大山文庫の整理作業の最終目標は、1:すべての文献をナンバリングする、2:文献の書誌情報をデータベース化し、キーワードで検索できるようにする、3:目当ての文献を棚から探し出せるようにする、の3点である。資料は主に雑誌、単行書、別刷りの3種類に分けられる（書簡やノートなどもあるが、現時点ではこれらは優先的に整理する対象からは外している）。資料ごとの具体的な整理作業のロードマップは図5の通りとなる。ここで留意することは、すべての人が何らかの作業に携われることである。例えばデータベース化ではパソコンへの入力作業が必要になるが、整理作業に参加する人の中にはパソコンが得意でない人もいる。また、そもそも外国語文献の書誌情報を読み取るのは一般の人にはかなりハードルが高い。実際の作業ではパソコンを扱わないような作業も用意しつつ、様々なツールを積極的に導入して、多くの作業を経験できるようにしている。例えば別刷りの表紙に書かれた著者名を判別し、著者ごとにファ

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">• 雑誌<ul style="list-style-type: none">- タイトルと所蔵巻号を入力してDB化- タイトルのアルファベット順に配架• 単行書<ul style="list-style-type: none">- ジャンルごとに分けて配架- 書誌情報と、分別したジャンル情報を入力してDB化• 別刷り<ul style="list-style-type: none">- 著者ごとに分け、アルファベット順に配架- 書誌情報を入力してDB化 |
|---|

図5 整理作業のロードマップ



図6 別刷りを著者ごとにファイリングする作業

ファイリングする作業（図6）は大半の人がこなせる作業である。非英語言語のものはどれが著者名なのか見た目にはわかりにくい場合もあるが、これはその都度質問してもらうことで対応している。また、雑誌の書誌情報の入力ではCiNii（国立情報学研究所の学術情報データベース）でまずタイトルを検索してもらい、雑誌名を特定し、登録されている書誌情報をこちらのデータベースソフトにコピーペーストしてもらおうという方法を取っている（図7）。これだと書誌情報の読み取りがスムーズに行え、ミスも減らすことができる（なお、これについては2019年3月に「ミュージアムと高齢者の互恵的關係」研究会で事例発表した際、図書館用の蔵書データベースソフトで使いやすいものがある、という指摘を受け、現在導入について検討している）。単行書のジャンル分け作業では特に非英語言語のタイトルの読み取りがネックであったが、タブレットやスマホに「Google翻訳」のアプリをインストールし、カメラ翻訳機能（活字文字をカメラで写すと指定の言語に翻訳して表示する）を使うこ



図7 雑誌の書誌情報の入力作業



図8 ロシア語文献のタイトル翻訳作業

とを思いつき、ある程度解決することができている（図8）。特にロシア語の地質学・古生物学文献（200冊程度）の分類では大きな威力を発揮した。

ボランティアによるミニ展示制作

参加する人の学びにつなげるという目的に立ち、整理作業の枠組みから少し拡大して、ボランティアが博物館の来館者に文庫を紹介するミニ展示を制作する、ということも試みている。文庫の中で興味深く感じた資料を1～数点選んでもらい、それを紹介するという内容である。例えば図版が美しい、面白い、あの有名な人の本、といった視点で構わないので、どういう視点で興味深いと感じるかを200字程度の文章で書いてもらい、筆者が別にその文献の解説を作成して資料の実物とともに展示する、という構成である。このミニ展示は2019年に2名の方に担当してもらい、欧米の19世紀～20世紀前半の様々な別刷りと、魚介類の毒の有無や効能・味について



図9 ミニ展示(欧米の19世紀～20世紀前半の様々な別刷り)

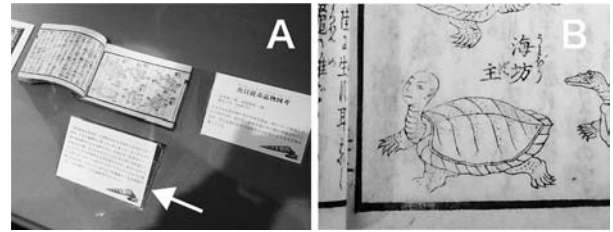


図10 ミニ展示(魚貝能毒物品図考)
A:矢印がボランティアによる紹介パネル B:「海坊主」

解説した江戸時代の書物「魚貝能毒物品図考」（青苔園著、高島春松画、嘉永2年）をそれぞれ紹介してもらった（図9、10A、10B）。前者は当時の別刷りの表紙のカラーさやおしゃれなフォント、後者は頭が人間、体がカメという「海坊主」なるおよそ実在するとは思えない奇妙な生物の図（図10B）に着眼したものである。本来であればその資料の内容や成立過程などを調べて解説を作ってもらい、というところまで踏み込めれば「学び」という点では理想的かもしれないが、現時点では負担感の少なさを優先している段階である。

まとめ

開始から2年を経て、整理に携わる人自身の学びにつなげつつ、文庫の整理を進めるという活動は軌道に乗ったと思われる。これはボランティアで登録されている方々の意欲のおかげに他ならず、博物館としてはその運営がうまく行っているというよりは、人材に恵まれているという評価をすべきだろう。コロナによる中断は歯がゆい思いである。少人数での再開を検討しているものの、お互いに会話して情報共有しながら作業をすることや、昼食後に持ち寄りのおやつを楽しむコーヒータイトムなど、活動を円滑にする要素はコロナの感染防止と相性が悪く悩ましい。状況が許すようになれば、再びボランティアの方々の力を借りて文庫の整理完了を目指していきたいと考えている。

謝辞：文庫の整理活動は17名のボランティアの方々の手で成り立っており、改めてここに感謝の意と敬意を表したい。また、本事例紹介の機会を与えてくださった追手門学院大学の瀧端真理子教授にお礼申し上げます。本稿は科研費（基盤研究B「ミュージアムと高齢者の互惠的関係に関する研究」、課題番号17H02026）の成果である。

【引用文献】

- 波部忠重 . 1996. 大山桂博士を偲ぶ . ちりぼたん 26:72-73.
- 石田 惣 . 2014. 大山桂博士の蔵書の寄託受け入れ . ちりぼたん 45:91.
- 奥谷喬司 . 1996. 弔辞 . ちりぼたん 26:71-72.
- 和田 岳 . 2009. ホネホネたんけん隊展への道 その1 なにわホネホネ団と博物館と私 . Nature Study 55(6):2-4.
- 和田 岳 . 2013. 皮を剥いで、骨を愛でる なにわホネホネ団の活動 . むくどり通信 (228):11.
- 和田 岳 . 2018. 自然史博物館の賢者の間—リタイアした研究者が集う場所—. Musa 博物館学芸員課程年報 (32):43-46.
- 山西良平 . 2011. 多様化する博物館活動 . 大阪市立自然史博物館館報 35:1-2.
- 無署名 . 1995. 博物館行事の補助スタッフを募集します . Nature Study 41(3):9-10.